

研究No. (記載不要)	16 - 学 - 4
-----------------	------------

## 平成16年度配分 研究成果の概要

研究名	多文化化する21世紀の都市とエスニシティ ーシドニー・メルボルンと浜松の比較研究ー				
配分を受けた 特別研究費	学長特別研究費				2500 千円
研究者氏名 (代表者)	学部名	学科名	職	氏名	共同研究の 場合の分担
	文化政策	国際文化	助教授	池上 重弘	研究の統括。多文化施策の日豪比較とインドネシア系住民コミュニティに関する日豪比較。
共同研究者	文化政策	国際文化	講師	岡田 建志	メルボルン・シドニーと浜松でのベトナム系住民コミュニティに関する比較研究
	文化政策	国際文化	講師	下楠 昌哉	多文化社会における民族的多数派の文化伝統の表象をめぐる研究
	文化政策	文化政策	講師	福岡 欣治	在住外国人の人間関係および組織に関する、社会心理学的視点からの研究
	文化政策	芸術文化	教授	伊藤 裕夫	浜松在住の外国人の団体に関する、アートマネジメントの観点からの研究

発表の方法 (予定で可)	<p>1 紀 要</p> <p>①『多文化化する 21 世紀の都市とエスニ ティーシドニー・メルボルンと浜松の比較 研究―』池上重弘(研究代表)、2004 年度 静岡文化芸術大学学長特別研究報告書</p> <p>②「外国人居住者は地域コミュニティの担い 手となり得るか?―焼津市・T団地での調 査から―」『静岡文化芸術大学研究紀要』 5:1-12. (池上重弘・福岡欣治)</p> <p>③「多文化化する公営住宅における居住者 の意識―焼津市・T団地の事例分析―」 『静岡文化芸術大学研究紀要』5:61- 78. (福岡欣治・池上重弘)</p>	号 数	<p>(平成 17 年 3 月 発行)</p> <p>第 5 号 (平成 17 年 3 月 発行)</p> <p>第 5 号 (平成 17 年 3 月 発行)</p>
	<p>2 学会等での発表</p> <p>①学会等名:ICCI(神田外語大学)共同研究 プロジェクト『日本のインドネシア人社会』( 於アルカディア市ヶ谷私学会館)第1回ワ ークショップ「大洗のインドネシア人コミュ ニティと宗教ネットワーク」 「プロテスタント教会ネットワークについて」 (池上重弘)</p> <p>②学会等名:オーストラリア・ニュージーランド 文学会関西研究大会(於同志社大学今出 川校地) 「作家として、英文学者として―A.L. McCann 作 The White Body of Evening に おけるメルボルンの神話構築の試み」 (下楠昌哉)</p>	発表日	<p>平成 17 年 1 月 23 日</p> <p>平成 16 年 11 月 13 日</p>
	<p>3 その他(すべて池上重弘の単独発表)</p> <p>発表の方法:</p> <p>①浜松市教育委員会 浜松文化アカデミー 「多文化社会における教育―オース トラリアの経験と日本の未来―」 (於静岡文化芸術大学)</p> <p>②しずおか県民カレッジ 地域葵講座 「グローバル化時代の地域社会―オース トラリアと日本における外国人子弟教育」 (於アイミティ浜松)</p> <p>③全国市町村国際文化研修所 平成 16 年 度第3回国際化対応コース 「海外の多文化共生事例―オーストラリア における多文化主義の光と影―」 (於全国市町村国際文化研修所)</p>	発表日	<p>平成 16 年 8 月 23 日 および 24 日</p> <p>平成 16 年 8 月 23 日 および 24 日</p> <p>平成 17 年 1 月 26 日</p>

注:配分を受けた翌年度の 6 月末までに提出

(研究の目的等)

本研究では、グローバル化のただ中にある 21 世紀の都市の魅力を文化的多様性に求める視点から、多文化主義先進国オーストラリアの代表都市としてシドニーとメルボルン、多文化化が急速に進展する日本の都市として浜松を取り上げ、比較研究を試みた。本研究においては、エスニックな背景を有する団体・組織の活動に焦点を当てながらも、行政機関、ホスト社会側の組織、エスニックな組織の相互関係を視野に入れ、日豪両国の多文化状況をめぐる現状と課題を明らかにすることを目的とした。

(研究の実施方法等)

本研究の柱となるのは次の2点であった。すなわち、①オーストラリアの多文化主義施策を政策実行者側だけでなくエスニックな背景を持った住民の側から捉える調査と、②浜松においてエスニックな団体・組織の活動が多文化共生へ向けてどのような可能性を有するかを探る調査である。この2つの柱を立てたのは、多文化化の歴史や背景は異なるが、オーストラリアの事例から浜松が学べることは数多いと考えたからである。さらに浜松の事例を日本国内の諸事例と比較検討するため、平成 14 年度より調査を開始した焼津市と平成 13 年度に視察で訪問した豊橋市の事例についても補足的な聞き取り調査を実施した。

池上は、オーストラリア(連邦政府レベルと州政府レベル、さらに市レベル)の多文化施策と日本(政府レベル、県レベル、市レベル)のそれとを比較検討した。さらにインドネシア人コミュニティの日豪比較を通じて、両国の多文化施策がエスニック・マイノリティにどのように影響し、認識されているかを検証した。補足的調査として、インドネシア・ジャカルタのキリスト教会におけるヒアリング調査を実施した。また、浜松や焼津、豊橋在住のニューカマー外国人の団体に対してヒアリング・参与観察を実施した。

岡田は、日豪両国において、ベトナム系住民の団体・組織ないしその関連組織の関係者へのヒアリング・参与観察と、図書館等での資料の閲覧・収集をおこなった。

下楠は、多文化主義が国策として押し出され、マイノリティの文化に不可避的に注目が集まる中、オーストラリアにおけるヨーロッパ白人多数派の文化—特に過去から受け継がれた文化—が現在どのように表象され、発信されているのか、いくつかのケーススタディを試みた。たとえば、英文学の傑作とされるジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』に関連したイベントを毎年開催しているディーキン大学(メルボルン)の助教授へのインタビュー、メルボルンとウィーンを舞台にした小説を発表しているメルボルン大学の助教授へのインタビュー、などである。その上で、多文化社会における民族的多数派の表象・言説編成に関して考察を進めた。

福岡は、浜松・焼津・豊橋などの事例について、外国人市民と日本人市民との人間関係、双方の活動に対する認識、および支援組織・自助組織の運営とその問題点等に焦点を当てた。

伊藤は、浜松市内の在住外国人自身の設立した団体(平成 15 年に設立された浜松ブラジル協会のようなものから、互助的団体、文化関係、宗教関係まで)について、広くヒアリングを実施した。

また平成 16 年 12 月 1 日には、オーストラリア研究の若きホープであり、私たちのシドニーでの調査をサポートしてくれているシドニー大学人類学部客員研究員の塩原良和氏を本学に招き、学長特別研究公開セミナー「行政、NGO、そして移民の日常～シドニー西部地域の多文化主義～」と題したセミナーを実施した。このセミナーには本学学生のほか広く市民も参加し、オーストラリアとの対比において浜松市での多文化共生を考える機会となった。

(得られた成果等)

オーストラリアの多文化主義や浜松の国際化に関する先行研究は、申請者らのこれまでの研究も含め少なくないが、当該エスニック集団の言語を用い、さらに日豪両国に住む当該エスニック集団の比較を視野に入れた研究となるときわめて稀であり、学術的価値が高い。その成果はすでに報告書『多文化化する 21 世紀の都市とエスニシティ—シドニー・メルボルンと浜松の比較研究—』にまとめた。また、多文化主義先進国の事例との比較で浜松の国際化を論じる視点は、国内の行政・市民運動に多大なる示唆を与えうるものであった。現実に市民対象の講座や教員研修の講座、さらには行政職員を対象として集中的研修での講座など、各種の機会において今回の研究成果を還元することができた。その意味で本研究は国際化をめぐる文化政策の実践活動として地域貢献の一環と位置づけられるだろう。

# 外国人との共生学ぶ

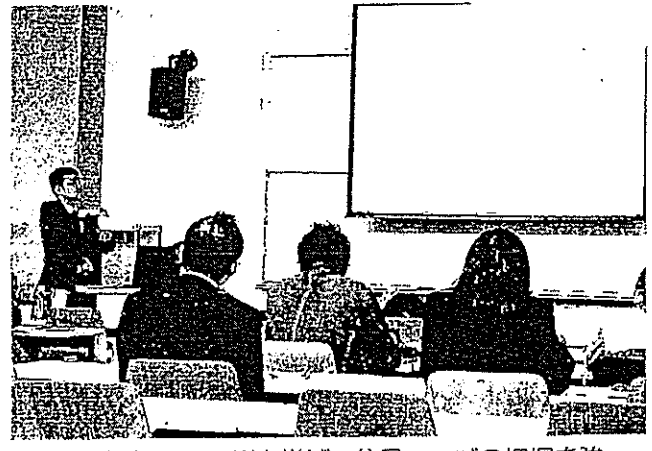
静岡文化芸大 公開セミナー

約二十人の前で講演し、多くの海外移住者が暮らすオーストラリアの取り組みを参考に、外国人との共生などについて考える公開セミナー「行政、NGO、そして移民の日常」シドニー西部地区の多文化主義」が一日夜、浜松市の静岡文化芸術大学で開かれた。シドニー大学人類学部の客員研究員塩原良和さん(シドニー)が学生ら

している地域は、シドニーの中でも、ベトナム系海外移住者が多い。高失業率や低収入といった課題を抱える一方で、貧困に起因する薬物問題などがある。こういった社会問題に対して、現地では行政よりも、非政府組織(NGO)や海外移住者らでつくるグループの活動が目立つという。

現地での研究を踏まえて、日本での外国人との共生には行政やNGOの活動が、外国人住民の

要望と合致しているかを、外国人の伝統芸能の分析することの雇用や教育といった生活にかかわることなどが重要と指す基本的な要望だけではない。 (松尾博史)



西シドニーの例を挙げ、住民ニーズの把握を強調する塩原氏(浜松市野口町の静岡文芸大)

静岡 04.12.3(金)

## 豪州移民の実情紹介

浜松・文芸大で 公開セミナー 塩原氏(シドニー大)招き

静岡文化芸術大(浜松市野口町)は一日夜、同大で公開セミナーを開催した。シドニー大客員研究員の塩原良和氏を招き、「行政、NGO、そして移民の日常」と題して講演した。

塩原氏は東南アジア系移民が多い西シドニーを例に話を進めた。行政とNGO、移民らによる組織がそれぞれの持ち味を生かして機能を発揮しているエピソードを写真を使いながら紹介。「住民のニーズを把握し、それが行政の活動と一致しているか分析すること。そして、雇用や生活から文化、社交イベントまでさまざまなレベルでの施策を実施することが必要」と強調した。

公開セミナーは同学内の五教員が取り組む多文化プロジェクトの一環として行われ、学生や行政関係者ら約二十人が聴講した。